

「みつはし書店」

○ 梗概

時代は2025年現代の3月から4月。

舞台は東京都小平市の商店街にあるみつはし書店。主人公三橋亮（38）は早くにして亡くした両親が営んでいた書店を継いでいる。しかし時代が進むにつれて本を読む人は少くなり、書店は経営難に陥つていた。そんなみつはし書店には学校に馴染めず親とも仲が良くない篠塚蓮（17）が毎日のように通い本を買ってくれたり、呼び込みをしてくれている。篠塚は書店がこのままでは無くなってしまうのではないかと恐れていた。実際、三橋は閉店するべきなのかもしれないと悩んでいた。

経営難が続いている中、家系は看護師である妻の三橋茜音（37）に頼りっぱなし。

同時期に、三橋はバリ스타をしている友人酒井陽介（39）と一緒にみつはし書店を改装してブックカフェをやらないかと誘れ

ていた。茜音もその誘いを知つていて絶対にそつちの方が良いと伝える。しかし、三橋はブックカフェが人気でその方が良いのは分かつていても両親が大切にしていて茜音との出会いの場でもあり思い出深いみつはし書店をブックカフェに変える事は嫌だと思つていた。色々と売り上げに繋がる工夫をしてみるが上手く行かず一度は酒井の誘いを受けるも酒井も現状に満足していない事に気づき誘いを断る。三橋は最後までみつはし書店のままで終わらせたいと決意する。茜音に想いを訴えて最終的には了承してもらえる。

最後の日、篠塚と酒井に手伝つてもらいながら公園で移動書店を酒井のコーヒー付きで行う閉店イベントを開く。三橋はそのイベントの光景を見て、自分が本当に見たかった景色は人々が本を囲んで笑顔でいる景色だと気づき新たな本の売り方を考えたいと茜音に伝える。笑顔で応援してくれる茜音。三橋は新なる道を歩んで行く。

人 物

三橋 亮（38）書店の主

三橋 茜音（37）三橋の妻、看護師

篠塚 蓮（17）書店の常連客、三橋の友人

酒井 陽介（39）三橋の親友

小木 進（78）客

○ 東京都・小平市・全景（朝）

T・東京都・小平市

桜が咲き始めている。

○ 同・アパート・外観（朝）

3階建てのオレンジ色のアパート。

○ 同・三橋家・ドア外（朝）

『308三橋』のネームプレート。

○ 同・リビング・中（朝）

シックで整頓されている部屋。

対面式のカウンターキッチン。

キッチンカウンターの上にある卓上力

レンダーは『3月』。

畳の部屋が隣にある。

○ 同・畳の部屋・中（朝）

仏壇が置いてある。

三橋拡と三橋春子の笑顔の遺影。

お位碑には『三橋拡 享年五十五二
〇一〇年三月二〇日』『三橋春子 享
年五十四 二〇一〇年三月二〇日』の
文字。

隣にはみつはし書店の前で撮影された
若い頃の三橋拡と三橋春子の笑顔の写
真が置いてある。

三橋亮（38）が仏壇に手を合わせる。
浮かない表情で仏壇の前を離れる。

○同・リビング・中（朝）

ソファーに腰を下ろして、ぼんやりし
ている三橋。

茜音の声「ただいま」

三橋茜音（37）が欠伸をしながら入
つて来る。

三橋は茜音の顔を見る。

三橋「お帰り、夜勤お疲れ様」

茜音「ありがと」

三橋「コーヒー飲む？」

茜音 「飲む♪」

三橋 「じゃあ淹れるね」

茜音 「助かる♪」

ソファーに腰を下ろす茜音。

茜音 「ところでさう先月の売り上げはどうだったの？」

○ 同・キッチン・中（朝）

綺麗に整頓されているキッチン台。

コーヒー・メーカーを操作している三橋。

三橋 「なかなか伸びなくて……」

○ 同・リビング・中（朝）

ソファーでスマホをいじりながら、ため息をつく茜音。

茜音 「そんなんで続けられるの？」

○ 同・キッチン・中（朝）

洗い物をしている三橋。

三橋 「大丈夫だよ。常連のお客さんはいるし」

「一ヒーメーカーが音を鳴らしている。

○ 同・リビング・中（朝）

ほんやりとスマホを眺めている茜音。

茜音「何とかなつてないから今の状況があるんでしょ」

キッチャンから出て来る三橋。

手にはマグカップを持っている。

三橋「でも、常連さんや街の人たちの為にも出来る限り続けたいんだ」

マグカップを茜音の前に置く。

茜音「綺麗事ばっか言って」

三橋「そうかもしれないけど」

三橋の顔をじつと見つめる茜音。

茜音「年下で本読んでる人なんていないよ」

三橋「それはさすがに主語デカすぎだよ」

茜音「デカくないって。私の看護師の収入だけじや限界あるからね？」

三橋「分かつてる。申し訳ないって思つてるよ。でも……」

茜音「あーもう朝からうじうじと少しでも儲ける努力してよね」

茜音は呆れ顔でそっぽを向く。

三橋「ごめん、仕事行つて来ます」

リビングを出て行く三橋。

○ 同・学園一番街（朝）

駅のすぐ傍にある商店街。

街灯の柱に『学園一番街』の看板。

居酒屋、薬局、衣料品店など様々な店
が立ち並んでいる。

閉店しているお店も所々にある。

ぼんやりした表情で歩いている三橋。

反対側から浮かない表情で歩いてくる
制服姿の篠塚蓮（17）。

立ち止まる篠塚。

篠塚「あ、三橋さん」

笑顔で立ち止まる三橋。

三橋「ああ、蓮くん。おはよう

篠塚「おはよう」

三橋 「今日も来る？」

篠塚 「もちろん行く！」

三橋 「じゃあ待ってるね」

篠塚 「うん」

嬉しそうに笑い駅へ歩いて行く篠塚。

手を振り前へ歩いていく三橋。

三橋 「はあ」

小さくため息をつく。

○ 同・線路（朝）

四両編成の赤い電車が走っていく。

○ 同・みつはし書店・外観（朝）

屋根の上に『みつはし書店』の看板。
商店街の一番奥にある小さな書店。

○ 同・店内（朝）

こぢんまりとしている店内。

三橋はレジカウンター内に置いてある
立て看板を持ち外へ出る。

○ 同・外（朝）

『OPEN』と記載されている立て看板を入り口前に置く三橋。

○ 同・学園一番街（朝）

行き交う人々。

○ 同・みつはし書店・店内

レジカウンター内でぼんやり外を眺めている三橋。

三橋はレジ台の横にある引き出しからバインダーファイルを取り出し開く。

『3月の売り上げ』と記載されている書類を眺める。

隣に記載されている『2月の売り上げ』に比べて低くなっている。
頭を抱え唸る三橋。

○ 同・学園一番街

酒井陽介（39）がみつはし書店へ向かって歩いている。

○同・みつはし書店・外

店内に向かって手を振っている酒井。

○同・店内

ドアの外にいる酒井に気づく三橋。

三橋 「陽介？」

店内へ入つて来る酒井。

酒井 「よつ！」

右手を上げて笑顔の酒井。

カウンターから出て来る三橋。

三橋 「どうした？ 仕事は？」

酒井 「これも仕事の一環♪」

三橋 「はあ？」

酒井 「いや真面目な話。今、時間平氣か？」

三橋 「うちはいつでも暇ですから」

酒井 「おいおい大丈夫かよ」

三橋 「ごめん、それで話つて？」

酒井「あのさ、一つ提案があつて」

酒井はバッグから一枚の企画書を取り出す。

三橋「ブックカフェ企画?」

酒井「そう。俺さバリスタやつてるじゃん?」

三橋「うん。陽介の淹れるコーヒー美味しいよね」

酒井「サンキューそんでさ、そろそろ自分の店もちてーなつて思つて」

三橋「へえ、すごいな!」

酒井「でも一人じや不案だし上手く行くかもわかんねーし」

三橋「それで俺と?」

酒井「おう、親友のお前と一緒にこの店改してブックカフェ出来たらお互いにともいつかなーって思つたんだ」

俯く三橋。

店内を見渡す酒井。

酒井「難しい状況なんだろ? この前スリパーで茜音さんに会つた時ぼやいてたぜ」

三橋 「そう、なのか」

酒井 「茜音さんの為にもさ、一度考えてみて
くれよ」

二カツと笑う酒井。

三橋 「ありがとう、少し考えてみるよ」

酒井 「じゃ、また連絡するな」

手を振り店を出て行く酒井。

カウンターの上に置かれたチラシを見
つめる三橋。

三橋 「ブツクカフェ、かあ」

小さくため息をつく。

○ 同・学園一番街(タ)

行き交う人々。

○ 同・みつはし書店・店内(タ)

篠塚が入つて来る。

篠塚 「こんばんはー」

三橋 「いらっしゃい」

レジカウンター内で手をあげて会釀す

る三橋。

篠塚 「お客さん来た？」

三橋 「蓮くんの前に二人だけ」

篠塚 「買つてくれた？」

三橋 「一人はね」

篠塚 「俺が言うのもなんだけど平氣？」

心配そうな表情で三橋を見る篠塚。
うーんと顎に指を当てる三橋。

篠塚 「三橋さん？」

三橋 「実はさつきね……」

○ 空（夕）

カラスが飛んでいる夕焼け空。

○ 同・みつはし書店・店内（夕）

椅子に腰を下ろしている篠塚と三橋。
怪訝な表情の篠塚。

篠塚 「ブツクカフェ……？」

三橋 「うん」

篠塚 「三橋さんブツクカフェ好きなの？」

三橋「いや行つた事はないけど。今人気なんだよね」

篠塚「俺は嫌だなあ。純粋な本屋が俺は好きだよ」

しょんぼりと俯く篠塚。

三橋「考えさせてくれとしか返事してないから！俺だつてこのままがいいし」

篠塚「店が儲かればブックカフェにならずにすむんだよね？」

三橋「え？あ、うん。そうだけど」

篠塚「じゃあ俺、明日から協力するよ！」

三橋「え、協力つて……」

立ち上がる篠塚。

篠塚「絶対なくさせないから！また明日！」

スタッフと店を出て行く篠塚。

茫然と入口を見つめている三橋。

三橋「蓮くん……」

○同・三橋家・リビング・中（夜）

ソファーに横になりスマホを眺めてい

る茜音。

ピコンと『佳織』からラインが入る。

茜音 「珍しい、なんだろ？」

トーク画面を開くと『子どもが生まれました！』の文面の後に子どもの写真。

茜音 「わ～かわいい！」

茜音は、返信を打つ。

『おめでとう！ かわいい！』

既読マークがつき、ありがとうのスタンプが入る。

茜音 「良いなあ」

ぽつりと呟く茜音。

玄関の鍵が開く音が聞こえる。
のそのそと起き上がる茜音。

三橋の声 「ただいま」

リビングへ入つて来る三橋。

茜音の視線はスマホに向けたまま。

茜音 「おかえり」

三橋は荷物を置き椅子に座る。

三橋 「今日さ、陽介が店に来たんだよ」

茜音 「そうなんだ」

三橋 「陽介に店の事話したでしょ。あんま外で言わないでよ」

茜音 「ただの世間話よ」

不満そうに答える茜音。

三橋 「陽介だつたからまだ良いけどさ」「

茜音 「それで、酒井さん何の用で来たの？」

茜音はスマホをいじりながら聞く。

三橋 「ブツクカフェを一緒にやらないかって誘われたんだ」

茜音はバツと勢いよく三橋を見る。

茜音 「もちろん賛成したのよね？」

三橋 「考えさせてくれって言つた」

目を見開く茜音。

茜音 「何でよ！ 良い話じやない！」

三橋 「良い話なのは分かつてるよ。だけど」「

茜音 「だけど何よ？ せつかく親友が誘つてくれてているのよ？」

三橋 「大切な場所なんだよ。そう簡単に改造なんて出来ない」

茜音「店が完全に無くなるより良いじゃない」

三橋「無くなるって決めつけないでよ」

茜音「あーもー友達は皆子ども出来たり旅行行つたりしてるってのにうちはどうしてこうなのよ！」

三橋「今それ関係ないよな」

不満顔な三橋。

茜音「関係なくない！　もう寝るつ」

茜音は机をバンツと叩きリビングを出て行く。

三橋「何なんだよ」

小さくため息をつく三橋。

三橋「茜音だつて昔は本屋好きだつたのに」
俯く三橋。

○同・みつはし書店・外（朝）

『OPEN』の立て看板。

○同・みつはし書店・店内（朝）

笑顔で入つて来る私服姿の篠塚。

篠塚「やつほうおはよう！」

三橋「おはよう」

篠塚「今日はねとある事に挑戦してみようと

思うんだ！」

三橋「とある事？」

篠塚「うん、まあ見ててよ！」

につこりと微笑む篠塚。

○同・線路（朝）

走っていく四両編成の黄色の電車。

○同・みつはし書店・外（朝）

中年の男性が入り口付近でうろうろしている。

○同・店内（朝）

三橋と篠塚は外にいる男性に気づく。

椅子から立ち上がる篠塚。

篠塚「昨日、この店にどうして人が入らない

か考えてみたんだー

三橋「う、うん」

篠塚「人が少なくて入りにくいんだと思う」

三橋「な、なるほど？」

篠塚「一人でもお客さんいるって分かれば入つて来てくれると思うよ」

微笑み篠塚は、うろうろし始める。

入り口付近の棚の前で立ち止まつて立ち読みしている篠塚。

ドアが開き中年男性が入つて来る。

冷静にお辞儀をする三橋。

三橋「い、いらっしゃいませう」

男性はレジとは反対側の棚を見始める。

立ち読みをしている篠塚。

男性が手に分厚い辞書を一つとケースに入つた上下巻セットの本をレジへ持つて来る。

レジ台に置かれた本。

○同・外(朝)

紙袋を手に持ち去つていく男性。

○ 同・店内（朝）

レジカウンター内でガツツポーズをしている三橋。

三橋 「やつた！」

篠塚 「ね、俺が言つた通りでしょ！」

レジカウンター前で笑顔を浮かべている篠塚。

ハイタッチをする三橋と篠塚。

三橋 「入りにくいつてのは考えた事なかった」
篠塚 「俺はさ静かな店のが入りやすいけど逆

の人もいるかもなつて思つたんだ。だから

今日は俺が呼び込みとか色々してみるよ！」

三橋 「いやいや悪いよ。バイト代も払えない
のに」

ぶんぶんと手を横に振る三橋。

真剣な表情の篠塚。

篠塚 「お金なんていらないから！　ここが無

くなるのが一番困るんだよ」

笑つて外へ出る篠塚。

申し訳なさそうな顔で篠塚の背中を見

つめる三橋。

三橋 「俺も頑張んなないと、だよなあ」

スマホを取り出す三橋。スマホのホーム画面。

慣れない手つきでアプリストアのアイコンを押し、インスタをダウンロードする。

三橋 「今はやっぱこれなんだろうな」

アカウント作成画面。

アカウントを作成する三橋。

○ 同・外（朝）

呼び込みをしている篠塚。

老夫婦が店へ入つて来る。

○ 同・店内

壁掛け時計は12時を指している。

5人の客が本棚を見ている。

○ 同・学園一番街

賑わっている商店街。

○ 同・みつはし書店・店内

三橋と篠塚だけになつて いる店内。

嬉しそうな三橋。

三橋 「ここ最近で一番卖れた日になつたよ！」

篠塚 「ほんと？ やつぱ呼び込みつて効くん
だね！」

三橋 「だね」

篠塚 「こうやつて続けて行けば売り上げに繋
がつていくかなあ」

真剣な表情で店内を見渡す篠塚。

スマホを取り出す三橋。

三橋 「実は俺もさもう少し何か出来ないかつ
て考えてインスタのアカウント作つてみた
んだ」

インスタ画面を篠塚に見せる三橋。

画面をじつと見る篠塚。

篠塚 「本当だ、インスタ！ でも三橋さんら
しくないね。どうしちゃったの？」

三橋「蓮くんみてたら俺も頑張んないとつて思つたんだ」

篠塚「そつかー！ 三橋さんの役に立てたなら良かつたよ！」

につこりと笑う篠塚。

篠塚「今日の分もさ少しは寿命に繋がつた？」

三橋「うん、本当にありがとう」

篠塚「ううん！ 俺が好きでやつてるだけだから気にしないでよ！」

三橋「俺もインスタの更新頑張つてみるよ」

笑い合う三橋と篠塚。

○ 同・三橋家・リビング・中（夜）

リビングに置いてあるキャビネットの引き出しの中を整理している茜音。

中にはアルバムがたくさんあり一つ手に取り開く。

茜音「うわ、懐かしい写真」

茜音と三橋の20代の頃の写真が貼られている。

写真の下には『文芸サークルのみんなで』のコメント。

茜音 「最近全然本読まなくなつたなあ」

三橋の写真はどれにも本が一緒に映つていて笑みが零れる茜音。

茜音 「亮くんは、ずっと変わんないなあ」

玄関の鍵が開く音が聞こえ引き出しにアルバムを仕舞う。

リビングへ入つて来る笑顔の三橋。三橋を不思議そうに見る茜音。

茜音 「どうしたの？ 何か良い事あつた？」

三橋 「分かる？ 今日ここ最近で一番良い売り上げ出でさう」

茜音 「へえ、良かつたじやない」

三橋 「蓮くんが協力してくれてさう」

首を傾げる茜音。

茜音 「れん、くん？」

三橋 「うん、常連客の蓮くん」

茜音 「ん？ え、おじいさんじやないの？」

三橋 「何で？ 蓮くんは高3だけど？」

茜音「は？」

三橋「あれ言つてなかつたつけ？」

茜音「聞いた事ないし、常連とかいうから大人だと思つてたのよ！」

三橋「それは偏見だろ」

茜音「今、そーいう話をしてるんじゃない！」

茜音の怒声にビクッと肩が揺れる三橋。

茜音「座りなさい」

三橋「は、はい」

おずおずと椅子に腰を掛ける三橋。

目の前に座る呆れ顔の茜音。

茜音「今までの話の感じだとその子、平日も休日も店に来てるつて事よね？」

三橋「う、うん。店が唯一の居場所だつて言つてて⋮⋮」

茜音「その子の事情は分からぬけど、高3つて事は受験もあるはず。親御さんはどうせ知らないんでしょ？」

小さく頷く三橋。

大きなため息をつく茜音。

茜音「あなたさ、その子の為とか言つてゐけどさその子の気持ち、利用してゐるだけじゃないの？」

三橋「そ、そんなことないっ」

茜音「あるでしょ。純粋な気持ち利用してだらだら先延ばしにする理由にしてるって」

うつと言葉が詰まる三橋。

茜音「分かった？」とおりあえずちゃんと蓮くんと話す事。訴えられても知らないよ？」

呆れ顔の茜音。

三橋「ごめん、ありがとう」

頃垂れる三橋。

茜音「じゃあ、私は寝るから」

三橋「おやすみ」

リビングを出て行く茜音の背中を申し訳なさそうに見つめる三橋。

○同・みつはし書店・外（朝）

立て看板を出してからスマホを取り出しが写真を撮る浮かない表情の三橋。

三橋 「とりあえず投稿してみよう……」
インスタを開く。

『オープンしました』と打ち込む。

○同・店内（朝）

棚の整理をしている三橋。

元気よく店へ入つて来る篠塚。

篠塚の声 「おはよー」ざいまーす」

振り向く三橋。

三橋 「蓮くんおはよう」

篠塚 「今日もお客様来るよう頑張るね！」

につこりと微笑む篠塚。

三橋は真剣な表情で篠塚を見る。

三橋 「その前にちょっと話しておきたい事が

あつて……」

首を傾げる篠塚。

○同・線路（朝）

走つていく四両編成の赤い電車。

○ 同・店内（朝）

椅子に腰を下ろしている三橋と篠塚。

浮かない表情の篠塚。

篠塚「そんな事本当に気にしなくて良いのに」

三橋「そういう訳にもいかないんだよ」

篠塚「親はさ俺に無関心だから帰りが遅くて
も土日ずっと外にいても気にしてない」

三橋「……そう、なんだ」

篠塚「うん。受験はあるし大学受けるけど俺

頭良いからさ別に今から詰めなくとも平気」

じつと三橋を見る篠塚。

篠塚「友達だつていないからここのしか俺の居
場所はないんだ」

三橋「蓮くん……」

篠塚「迷惑なら来るのやめるけど……」

三橋「迷惑じゃないよ！　ただ心配なだけで」

篠塚「俺は大丈夫だよ！」

立ち上がる篠塚。

篠塚「そーいう事だから今日も呼び込みする

ねつ！」

満面の笑顔の篠塚。

店を出て行く篠塚の背中をじつと見つめる三橋。

三橋 「……ありがとう」

三橋も立ち上がりレジを開ける。

ポケットの中でスマホが通知を告げる。

スマホを取り出す三橋。

『酒井』からラインが入っている。

『まだ考え中?』

とメッセージが表示されている。

メッセージを眺め俯く三橋。

三橋 「うーん」

○ 同・三橋家・リビング・中（朝）

ソファーで横になつている茜音。

茜音 「ちゃんと話したかなあ」

天井を見つめる茜音。

○ 同・みつはし書店・外

楽しそうに呼び込みをしている篠塚。

○ 同・店内

三人の客が本棚を眺めている。

一人の男性が文庫本を一冊買って行く。

レジを打つ三橋。

三橋 「ありがとうございました」「

○ 同・外

人が疎らになつて いる商店街。

○ 同・店内

店内へ入つて来る篠塚。

篠塚 「日曜なのに入少ないねえ」

三橋 「うーん、インスタもあんま効果なしが」

篠塚 「本屋良いのになあ」

三橋 「蓮くんみたいな若い子がそう言つてくれるのすごく嬉しいよ」

篠塚 「俺だけが思つても売り上げに繋がらない……」

泣きそうな表情を浮かべている篠塚。

三橋は篠塚の肩に手を置く。

三橋 「蓮くんがいてくれてすごく助かってる
よ。ありがとう」

篠塚 「三橋さん……」

三橋 「ご飯にしようか」

頷く篠塚。

○ 同・三橋家・リビング・中(夜)

ソファーで横になっている茜音。
リビングへ入つて来る三橋。

茜音は起き上がり三橋を見る。

茜音 「蓮くんに話した?」

三橋 「話した、けど……」

茜音 「けど、何よ?」

○ 同・アパート・外観(夜)

○ 同・三橋家・リビング・中(夜)

頃垂れている三橋と呆れ顔の茜音。

茜音 「はあ? この期に及んでまだ頑張りた
いつてあなたアホなの?」

三橋「分かってるけど！でも、インスタも作つたばつかだし、もしかしたら……」

茜音「ないよ。早くブツクカフェやるつて返事しなさいよ。他に行かれちゃうよ？」

三橋「後一週間だけ様子をみたいんだ」

真剣な表情で訴える三橋。

茜音「家族の私より他人の気持ちを優先させるのね」

大きなため息をつく茜音。

三橋「ごめん、店の事に関してはどうしても譲れないんだ」

茜音「そんなに店が大事？」

三橋「大事だよ。だつて……」

茜音「（遮つて）勝手にすれば！」

泣きそうな顔でリビングを出て行く茜音。頭を抱える三橋。

三橋「ごめん……茜音。一週間だけ許して」
カレンダーを見る三橋。

○ 同・学園一番街（タ）

壁に『商店街一番奥に書店あります』と記載したみつはし書店の案内ポスターを貼る制服姿の篠塚。

○同・みつはし書店・店内（夜）

一人の若い男性客が棚を眺めている。

○同・店内（朝）

棚を見渡してうーんと唸つている三橋。明るい表紙の文庫本を手前の棚に持つてきてみる。

カウンターで『店長おすすめコーナー』

と紙に書き一番手前の棚の壁に貼る。

○同・外

若い女性が立ち止まり中を伺うが過ぎ去ってしまう。

○同・店内（夕）

うろうろしている制服姿の篠塚。

○ 同・店内（夜）

スマホを眺めている三橋は小さくため息をつく。

反応ゼロのインスタ画面。

三橋 「宣伝つて難しいなあ」

浮かない表情の篠塚。

篠塚 「色々やつてみても変わんないね」

三橋 「そうだね……。何でかなあ」

篠塚 「俺に友達がいればなんか変わったかも
しれないのに」

三橋 「蓮くん……そんな気持ちにさせちゃつ
てごめんね」

首を振る篠塚。俯く三橋。

○ 同・三橋家・リビング・中（朝）

卓上カレンダーは『4月』。

ソファーに座り天井をぼんやりと見つ
めている三橋。

○ 同・外（朝）

桜が舞っている。

○ 同・三橋家・リビング・中（朝）

スマホを取り出しラインを開き『酒井』と表示されているトーク画面に文字を打ち込む三橋。

『今晩会える？ 話したい事がある。』既読マークがつきOKのスタンプがおくれてくる。

無言でリビングへ入つて来る茜音。

三橋 「おかれり」

茜音 「……」

茜音は三橋を無視し寝室へ入ろうとする。

三橋 「今日、陽介に会つて来るよ」

茜音 「……そう」

寝室へ入つて行く茜音。

小さくため息をつく三橋。

○ 同・一橋学園駅北口・外観（夜）
改札口の上に『一橋学園駅北口』の看板。

○ 同・ホーム（夜）

混雑しているホーム。

電車に乗り込む三橋。

○ 走っている電車・車内（夜）

混雑している車内。

ドアに寄りかかっている三橋。

車内を見渡す。

スマホをいじっている若い男性。

パズルゲームの画面が表示されている。

イヤホンをつけてスマホを横にして動画を見ている女性。

車内から視線を反らし窓の外を見る。

○ 国分寺駅・外観（夜）

T・国分寺駅

○ 同・セレオ・国分寺・外観（夜）

10階建ての駅ビル。

ビルの壁に『セレオ国分寺』の文字。

○ 同・1階・カフェ・シクラメン・外観（夜）

入口の上に『カフェ・シクラメン』の

看板。

○ 同・外（夜）

入り口前でうろうろしている三橋。

スマホを手に操作しようとする三橋。

エプロンをつけた制服姿の酒井が店内から出て来る。

三橋の肩をポンッと叩く酒井。

酒井「亮」

ビクッと肩を揺らして振り向く三橋。

三橋「うわつびつくりした」

酒井「ごめんごめん、来ててくれてサンキュー」

三橋「いやこつちこそ急にごめん」

酒井「大丈夫うお前にコーヒー淹れたら上が

らせてもらえる事になつてゐるから！」

三橋「ありがと」

酒井「特別席用意してあるぜ！」

三橋「何か恥ずかしいな」

照れ臭そうな三橋。

嬉しそうに案内をする酒井。

○同・店内（夜）

木目調のナチュラルで広々としている
店内。女性客が多い。

○同・キッチン・中（夜）

酒井と他に二人のスタッフがいる。

酒井は慣れた手つきでコーヒーを淹れ
始める。

店内では、若い女性客が楽しそうにスマホで写真を撮つてゐる。

奥のテーブル席でパソコン作業をして
いるサラリーマンがいる。

若いカップルが自撮りをしていたりと
楽しそうな雰囲気。

優しい表情でコーヒーを淹れている酒
井。

じつと見つめる三橋。

○同・店内（夜）

カウンター越しに酒井が三橋の前にコ
ーヒーカップを差し出す。

酒井「どうぞ」

受け取る三橋。

三橋「ありがとう、すごい良い匂い」

酒井「だろ？」

ニカツと笑う酒井。

酒井はカウンターの上にもう一つコー
ヒーカップを置く。

エプロンを取り酒井はキッチンから出
て来る。

三橋の隣に腰を下ろす酒井。

人が疎らになつてきている店内。

「コーヒーを飲む三橋。

三橋 「陽介のコーヒーはやっぱ美味しいな」

酒井 「ま、正確には俺のじやないけどさ」「

三橋 「でも本当に他の店と違う気がする。素

人の俺でも分かるよ」

酒井 「サンキュー」

コーヒーを飲んでいる三橋と酒井。

酒井 「それで話つてのはブツクカフェの事だよな?」

三橋 「うん。色々考えたし宣伝とかやつてみたけどやつぱり上手くいかなくて……」

酒井 「そつか」

三橋 「陽介とブツクカフェやるのも良いなって思い始めたんだ」

前のめりになる酒井。

酒井 「じゃあ!」

三橋 「でも、ここに来てやつぱ違うだろってなつてる」

酒井 「はあ?」

三橋 「さつき陽介がコーヒー淹れてる姿見て

さ伝わってきたんだよ。お前も本当はブックカフェでなんて満足できないだろ?」

じつと酒井を見つめる三橋。

はつとなり頭を抱える酒井。

酒井「あゝやつぱ長年の付き合いのお前にはわかっちゃうか?」

三橋「分かるよ。俺も妥協出来ないから。だからブックカフェはやらない」

酒井「そう、だな」

三橋「お互いに本当の気持ちを大事にしよう。

綺麗事つて言われるだろうけどさ」

ふつと笑う三橋。微笑む酒井。

酒井「ああ。その方が絶対後悔しないよな」

三橋「うん、後悔だけはしたくない」

酒井「でも茜音さん許してくれるのか?」

三橋「今の店のまま閉店させようと思つてる。その後の事はこれから考えるけど」

酒井「……そつか。なあ、それならさ閉店イベントやるのはどうだ?」

三橋「閉店イベントか、確かに良いかも。あ、

それならさ陽介も手伝ってくれないか？」

酒井「え？」

三橋「この前見た記事で良いなーって思ったのがあつたんだ！」

笑顔の三橋と首を傾げる酒井。

○同・三橋家・リビング・中（朝）

テーブルで向き合つて座つている三橋と茜音。茜音は呆れ顔。

茜音「結局ブックカフェは断つたのね」

三橋「うん、お互いに本当にやりたい事じやなかつたんだ」

茜音「そう」

三橋「最後まで今のみつはし書店のままでいい。だつて、あそこは……」

俯く三橋、優しい顔になる茜音。

茜音「……私たちが出会つた場所だものね。

残したい気持ちは分かるよ」

三橋「覚えてたんだ」

茜音「当たり前でしょ。でも、そんな理由だ

けで続けられるほど世の中甘くない」

三橋「分かつて。だから、次の土曜日までにする。今日ちゃんと閉店のチラシも貼る」

茜音「そつか」

三橋「ただ最後に閉店イベントをやらせて欲しい」

茜音「良いんじゃない?」

三橋「ありがとう」

頭を下げる三橋。

○同・みつはし書店・外（朝）

『みつはし書店』の看板。

力バンからクリアファイルとガムテープを取り出す三橋。

中には『閉店のお知らせ』の紙。紙を取り出しどアに貼る。

篠塚の声「閉店、するんですか……」

振り向く三橋。泣きそうな表情の篠塚が茫然と立っている。

三橋「うん。ごめんね。でもね、最後に閉店

イベントするから蓮くんにも手伝つてもらえたならなつて思つてるんだけど」

無言で走り去つてしまふ篠塚。

三橋 「蓮くん……ごめん」

○ 同・駅前の道（朝）

桜が散つている。

○ 同・みつはし書店・店内（朝）

文学作品、ライトノベル、学術書などの本を手に取りカゴに入れて行く三橋。空の棚。

入り口に置いてある本が入れられてい るカゴ。レジ台の上には値札。

○ 同・みつはし書店・外（夕）

折りたたみ式の台車が置いてある。 ドアをトントンと叩いている酒井。

○ 同・店内（夕）

店内に入つて来る酒井。

酒井に駆け寄る三橋。

三橋 「陽介！」

酒井 「いよいよ明日だな」

三橋 「うん。手伝い助かるよ

笑顔の三橋と酒井。

○ 同・学園一番街（夜）

トボトボと歩いている篠塚。

○ 同・三橋家・リビング・中（夜）

ソファーに寝転びスマホをいじつてい
る茜音。

茜音 「うーん」

『町内会』と表示されたトーク画面。

メッセージを打ち込む茜音。

『明日、みつはし書店が閉店イベント
として移動販売を駅前の公園で行うの
でよかつたら来てください！』

送信ボタンを押す茜音。

○ 同・みつはし書店・外（朝）

入口前で立ち止まり深呼吸をする篠塚。

○ 同・店内（朝）

篠塚に気づく三橋。

三橋「蓮くん！」

手を振るが篠塚は視線を反らす。

じっと篠塚を見ている酒井。

酒井「お、あの子が例の高校生？」

三橋「うん、とても良い子なんだ」

酒井「何で入つてこないんだ？」

三橋「閉店の道選んだから失望させちゃったのかも」

俯く三橋。

酒井「でも来てるつて事は思うところがあるんだろ。よし、俺が助け船出してやるよ」

酒井はニッと笑いドアを開けに行く。

顔を上げる三橋。

ビクッと肩が揺れる篠塚。

篠塚の前に立つ酒井。

酒井「どうもー酒井陽介でーす！」

篠塚「……」

酒井「入りなよー亮が寂しがつてんぞ！」

おずおずと店内へ入つて来る篠塚。

篠塚「……三橋、さん。この前は無視してす

みませんでした！」

三橋「ううん、俺の方こそ閉店を選んでごめんね」

篠塚は首を振る。

篠塚「俺、ポスター作つてきた！」

三橋「え？」

篠塚「やつぱりこのまま何もしないのは嫌で、俺に出来る事ないかなつて思つて」

トートバッグからポスターを取り出しカウンターの上に置く篠塚。

篠塚「役に立てるかわからんないけど」

三橋「すごく助かるよ、ありがとう！」

篠塚「良かった。たくさん刷つたからあちこちに貼ろう！」

笑顔でポスターを見つめる三橋と酒井。

酒井「すげえ上手いじやん。俺が店出す時に
も頼もうかなー」

篠塚「バイト代くれるなら作りますよ」

酒井「何?俺にはつれないじやん」

篠塚「だつて、ブックカフェの人でしょ?」

酒井「その話はとっくに無になってるし」

篠塚「でも!」

三橋「まあまあ二人とも仲よくしよう!」

篠塚と酒井を宥める三橋。

ふつと笑う酒井。

酒井「喧嘩してる時間がもつたいいないな」

篠塚「そうですね」

三橋「じゃあ、準備始めようか」

拳を突き合わす三橋、篠塚、酒井。

篠塚はポスターを持って外へ出て行く。

○ 同・学園一番街（朝）

商店街の壁に貼られている『みつはし
書店閉店イベント移動書店のお知らせ』
のポスター。

チラシ配りをしている篠塚。

篠塚 「10時から駅前公園で移動書店が開きます！ コーヒーもありますよ」

チラシには酒井の名刺もクリップでついている。

小木進（78）がチラシを受け取る。

○ 同・みつはし書店・外（朝）

台車に本を積み終える三橋。

三橋 「行こうか」

酒井 「おう！ 最高の一日にしようぜ」

三橋 「うん」

店内の電気を消して鍵を閉める三橋。

台車を押して歩き出す三橋と酒井。

○ 同・学園駅前公園・中（朝）

公園前に『学園駅前公園』と刻まれた

石銘板。

折り畳み式の机に本を並べて手元に電卓とコインケースを置いている三橋。

隣にコーヒーメーカーなどの準備をしている酒井。

三橋 「よしつ準備は完了」

酒井 「後は客が来るかだな」

三橋 「今のところは来そうな気配がないな」

辺りを見渡す三橋。

篠塚の声 「駅前で移動書店やつてまーす！」

ついでにコーヒーもありますよ♪」

顔を見合わせる三橋と酒井。

三橋 「俺たちも頑張ないとだな」

酒井 「俺のコーヒーはついでなのが気に障る

が仕方ないな」

ふつと微笑む酒井。息を吸い吐く三橋。

三橋 「みつはし書店でーす！ 閉店セールな

ので安いですよ！」

酒井 「一緒にコーヒーもいかがですか？ 無料
ですよ～！」

三橋と酒井の声に数人が立ち止まるも
なかなか前まで来ない。

三橋 「うーん」

喰つて いると チラシを 手に 持つた 小木
が 近づいて 来る。

小木 「移動書店か 良いねえ」

三橋 「ありがとうございます、立ち読みだけ
でも 良かつたら」

酒井 「コーヒー 飲める よう で したら お淹れし
ます よう」

小木 「是非 淹れて 欲しいね」

酒井 「かしこまりました」

酒井が コーヒーを 淹れ 始める。

三橋を見る 小木。

小木 「みつはし書店 無くなつてしまふのか」

三橋 「はい」

小木 「買ひに行けなくて すまないねえ」

三橋 「いえ……」

小木 「どうにも 最近 足が 痛くて、なかなか
遠くまで歩けないんだよねえ」

三橋 「そう、 だつたんですね」

小木は 机を見渡し 一冊の本を 手に 取る。

小木 「おお、 この本は……」

三橋「ああその本ずっと棚の奥で眠っていたんですよ。片付けてたら出て来て……」

小木「ずっと探していた本なんだ」

三橋「ほんとですか？」

小木「ああ、出会えて良かつた」

小木は笑顔でお金を払い本とコーヒーを受け取りベンチに腰を下ろす。

酒井「良かつたな」

三橋「うん」

ベンチに座る小木を見て嬉しそうに笑う三橋。

○ 同・学園駅前公園・中

チラシ配りをしている篠塚。

数人の客がベンチに腰を下ろしている。

三橋は辺りを見渡して小さくため息をつく。

三橋「結局こんなものなのかな」

酒井「まだ昼だしこれから増えるだろ」

三橋「だと良いけど」

茜音の声「亮くーん！」

はつと振り向く三橋。

三橋「茜音？」

茜音の周りにはたくさんの年配の男女、

30代、40代くらいの男女がいる。

三橋「え、茜音？ その人たちは？」

茜音「町内会の方々！」

につこりと微笑む茜音。

三橋「茜音、ありがとう！」

茜音「別に。皆さんが興味あるって言うから
連れて来てあげただけよ」

三橋「それでもありがとう！」

酒井「あ、茜音さん！ 茜音さんも良かつた
らコーヒー飲んでください！」

茜音「じゃあ貰おうかな」

酒井の机の前で町内会の人たちに接客

をしている三橋を眺めている茜音。

コーヒーを茜音に手渡す酒井。

酒井「亮つて本の話してる時が一番輝いてますよね」

コーヒーを受け取りふつと微笑む茜音。

茜音「ほんとにね。亮くん、私お昼買つて来るね」

三橋「助かるよ」

ひらひらと手を振つて公園を出て行く茜音。

賑わつてゐる公園。篠塚が入つて来る。

篠塚「すごい！ 本が好きな人つてこんなにいたんだ……」

涙目になりながら公園を見渡してい

篠塚。

酒井の声「おーい、蓮くん」こつち手伝つてくれ！」

三橋と酒井の前に列が出来ている。

篠塚「今行く！」

篠塚は本の在庫を段ボールから取り出し手伝つてゐる。

楽しそうに接客をしている三橋。

三橋 「ありがとうございます！」

ふうと息を吐く三橋。

酒井 「ようやく列が引いたな」

三橋 「今の内にお屋にしようか」

紙袋を持って公園へ入つて来る茜音。

茜音 「お待たせ！」

三橋 「ありがとうございます」

茜音 「どういたしまして。あ、その子が噂の蓮くん？」

篠塚 「はい、篠塚蓮です。亮さんにはいつもお世話になっています」

茜音 「こちらこそ夫と仲良くしてくれてあります」

がとう

につこりと微笑む茜音。

照れ臭そうな篠塚。

篠塚 「三橋さん、俺決めました」

三橋 「ん？」

篠塚 「大学入つたら本好きが集まるサークルに入ります！ 後、本屋でバイトします」

三橋 「良いと思う！」

篠塚「でも、三橋さんがまたどこかで本屋をやるならその時は三橋さんの所にすぐに行きます」

三橋「あはは～ありがとう」

笑い合う三橋と篠塚。酒井は手を叩く。
酒井「よし、いつまた混むか分かんないし飯にしようぜ！　コーヒーもあるぞ～」

移動書店の机の前に折り畳みの椅子を並べて腰を下ろす三橋、茜音、篠塚、

酒井。

孫に読み聞かせをしているおじいちゃんおばあちゃん。

コーヒーを片手に読書好きのグループが盛り上がっている。

篠塚も輪に加わり笑顔。

その光景を笑顔で眺めている三橋。

三橋「この景色が見たかったんだ」

茜音「え？」

三橋「大学の文芸サークルみたいだろ？」

茜音「うん」

三橋 「あの空間が大好きだったんだよ」

茜音 「うん、私もなんか懐かしい気持ち」

ふつと微笑む茜音。

三橋 「俺、新しい本の売り方を考えてみたい」

真剣な表情で茜音に訴える三橋。

茜音 「亮くんはそう言うと思ったよ」

三橋 「ごめん」

茜音 「その代わり家事はやってよね？」

冗談ぽく睨む茜音。

三橋 「も、もちろんだよ！ 何でもする！」

茜音 「ま、仕方ないよね。亮くんは昔から本
が一番なんだから」

三橋 「茜音の事もちろんと考へてるよ」

茜音 「良いのよ本が一番で。そーいう亮くん
を好きになつたんだから」

三橋 「茜音……」

茜音 「やりたい事やつたら良いよ。私も看護

師の仕事好きでやつてるしね」

三橋 「ありがとう、茜音」

茜音を見て笑う三橋。